

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	虫明 眞砂子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論 文 題 目			
合唱教育が内包する課題の分析と改善に向けた取り組みに関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	三村 真弓	
審査委員	教授	井上 弥	
審査委員	教授	枝川 一也	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、合唱教育における歌唱と発声の実践方法を対象とし、児童・生徒が自分の持っている声を最大限に活かして、のびやかに美しく発声するためには基本的にどのような能力が必要なのか、合唱で美しいハーモニーを作るにはどのような指導が望ましいのかという観点から、合唱の基礎能力の分析と向上のための試み、諸外国及び日本における合唱教育の現状と課題、合唱歌唱の発声の分析など、多角的な視点から合唱教育が抱える課題に対して検討を行い、その改善に向けた有益な合唱指導法を提示することを目的としている。</p> <p>論文は、序章、第1章から第4章及び終章で構成されている。</p> <p>第1章では、児童・生徒の合唱の基礎能力の向上策の検討を行っている。まず、呼吸法や姿勢について、Phillips, Kenneth H. <i>Teaching Kids to Sing</i> を参照しながら考察し、次に、「体のリラックス」、「ウォームアップ」に関して、体育科の「体ほぐし」の視点から検討している。その結果、発声指導では、呼吸法と姿勢を基礎とし、幼少期からの継続的な呼吸法の練習と正しい認識にもとづく姿勢の捉え方が重要であることを示している。さらに、和声感の育成について考察を行い、和音の構成音の持っている倍音や結合音の声質や特徴を認識し、その知識を活かした音程練習を合唱練習に取り入れることが、合唱づくりの基礎になり得ることを示している。</p> <p>第2章では、諸外国及び日本の合唱教育の事例を分析している。米国、ハンガリー、イタリア、フィンランドの視察から、多くの国では子どもたちの心身を大切にした発声指導が行われ、音楽の授業では、教師が良い発声で美しい声を聴かせており、生活の中で子どもたちが日常的に自然に歌うことを習慣づけられていることを現地で確認している。日本については、全国的に、学校組織における合唱活動はやや停滞気味であることが示され、合唱指導者の育成、バランスの良い教育内容の検討及び長期的に合唱を楽しめるような指導が必要であることを明らかにしている。</p> <p>第3章では、心技体のバランスと歌唱との関係にもとづく合唱指導を検討するために、ウォームアップの効果を検証している。岡山大学の受講生を対象にウォームアップを実践し、その効果を自己評価させた。その結果、身体的ウォームアップの効果と発声練習の効果の間には、相関係数 0.72 という強い相関が認められた。また、精神面でのウォームアップであるメンタルトレーニングの効果を心理面、技術面、身体面に分けて 10 段階評価させ</p>			

た結果、練習初日と最終日で比較すると、それぞれ平均で心理面では 20%、技術面では 38%、身体面では 13%の上昇がみられた。これらの結果は、体ほぐしのストレッチや脱力などの体を開放するウォームアップが発声に有効であり、また、メンタルトレーニングや身体のウォームアップが、技術面の向上と同時に演奏力や本番に力を発揮できる能力を養っていていることを示している。さらに、自己肯定感を増すといったメンタル面を大切にしたい合唱指導が、合唱初心者へは必要であることを指摘している。

第 4 章では、合唱歌唱の発声の問題を検証するため、アンサンブル演奏の聴取実験、プロとアマチュアの合唱団員に対するアンケート調査、プロ歌手に対する音声の可視化実験を実施し、合唱とソロの発声を比較することによって両者の特徴を分析し、両歌唱の発声の共通点、相違点、留意点を明らかにしている。その結果として、プロの演奏者、アマチュアの演奏者は、いずれも声量や発音等をコントロールすることに努めており、さらにプロはハーモニー、ビブラートへの意識を、アマチュアは呼吸や姿勢への意識を高めていることが確かめられた。このような意識を明確化することにより、それぞれの歌唱形態に一層ふさわしい音色を作り出すことが可能となり、そのことが新たな合唱指導を可能とすることを示している。最後に、4 名のプロ歌手に単独で自由に歌うソロ歌唱様式と複数で声を合わせる合唱歌唱様式に分けて歌唱してもらい、その音声を音声の可視化装置（音カメラ）を用いて分析した。その結果、ソロ歌唱様式では、音声の到来方向は 4 つの独立な方向であったのに対して、合唱歌唱様式では、音の到来方向が中央に収束する傾向が画像で確認された。これは 4 つの音源が合成されて単一の音源に近づく傾向を示していることと理解でき、合唱歌唱の特徴を音響学的に捉えることが可能であることを実験的に明らかにしている。このことから、この装置の合唱教育への支援としての利用が期待できる。

本論文は、次の 4 点で高く評価できる。

1. 歌唱や合唱の演奏の力を向上させる上で、メンタル面のウォームアップ（心理的側面）、和声感の育成（技術的側面）、心身のリラックスを取り入れた呼吸法や発声練習（身体的側面）という 3 つの側面が重要であることを指摘し、これら 3 つの側面のバランスと演奏の間に密接な関連性があることを明らかにしたこと。
2. 欧米 4 か国と日本における合唱団の視察を通して、発声の捉え方、歌唱教育の方法、学校と社会における音楽教育に対する考え方などに関して、諸外国と日本との相違を明らかにすることにより、日本の音楽教育の課題を提示し、日本人に相応しい合唱指導法を提唱したこと。
3. 合唱歌唱とソロ歌唱における発声の問題を、両者の発声比較という視点から分析することを着想し、実際の歌唱者自身に対するアンケート調査、アンサンブル演奏の聴取実験及びプロの演奏家の音声に対する音カメラによる可視化実験を実施し、合唱歌唱とソロ歌唱の発声の特徴を客観的に見出したこと。
4. 合唱指導を支援する新しい方法として、音声の可視化装置（音カメラ）の導入の可能性を示したことによって、今後の合唱教育の在り方に重要な示唆を与えたこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 3 月 4 日